

# 「平和の灯」劣化調査へ

## ドローンなど最新技術駆使検討

コンクリ  
診断士会



広島県コンクリート診断士会(米倉曲州夫会長、写真)は、会員から有志を募り、広島平和記念公園内にあるコンクリート製

モノメント「平和の灯」

の調査・診断をボランティアで実施する方針を明らかにした。管理者の広島市からはすでに内諾を得ており、2月末頃まで参加者を募集したのち、4月末〜5月に約3日間かけて現地を調査。その後、長寿命化計画を含めた報告書を市に提出する

予定という。『平和の灯』は、昭和39年に平和の灯建設委員会によって建立。手のひらを大空に広げた形を表現したRC造の記念碑で、丹下健三氏が設計を手掛けた。

で作業を分担しながら外観形状・寸法の計測や目視調査、コンクリート品質調査、配筋状況調査、鉄筋かぶり・腐食状況調査、塗装塗膜の状況・材質調査などを行う。

記念碑という性質上、できる限り非破壊の調査とする予定で、会員の技術向上・伝承等の観点から、ドローンによる空中撮影や赤外線レーザーなど最新技術の駆使を検討する。

幸い、診断士会員74人賛助会員26社の中には補修業者やコンサルのほか、非破壊検査業者や塗装業者など様々な業種がいるため、広く協力を呼びかけていく方針だ。

鈴木副会長は13日に開かれた「第22回コンクリート診断士会定例サロン」で、これらの調査計画案を発表。複数の会員が参加に意欲を見せた。



平和公園内の平和の灯

今回の活動を担当する診断士会の鈴木智郎副会長(復建調査設計)によれば、ひび割れ補修の形跡はあるものの、詳細な補修歴は不明。記念碑裏側などには鉄筋腐食が原因とみられるコンクリートの浮きが生じている状態で、「再劣化を起こしている可能性が高い。放置すれば大補修が必要になる」という。また、塗装の劣化や表面の汚れも目立つため「世界中の人が見に来る場所。汚れや劣化で見苦しい状況は避けたい」というのが活動の動機だ。

調査では、参加者を4班程度に分け、約3日間

このほか、サロンでは、昨年11月に開かれた「コンクリート診断士会中国5県会議(宇部市)や」第3回業務体験発表会(金沢市)の内容報告なども行われた。